

日本教育学会・特別課題研究「大震災と教育」

事務局ニュース NO. 2 [2012. 05. 03]

■ニュース1 ■ 科研費採択：昨秋、藤田英典会長を代表として申請した科研費・基盤研究 [A]「東日本大震災と教育に関する総合的研究」の採択内定通知が藤田会長の所属する共栄大学に届いたとの連絡が入りました。申請額からの減額、申請時以降の研究グループの再編等を考慮し、会長、事務局、研究グループの責任者間で予算枠組みの調整が行われ、最終交付申請が行われています。

<研究目的> ※交付申請書より抜粋

本研究は、東日本大震災・福島原発事故とその後の事態・対応の推移について、子どもと教育に焦点をあて以下の三つの課題を探求・遂行するものである。

(1) 記録の作成・保存：震災・原発事故とその後に関する事実（人びとの思い・葛藤や学校等の対応・取り組みを含む）に関する包括的記録を作成し、記憶に留め、後世に残し、今後の研究・政策・実践の参考に供する。

(2) 学術的・政策的・実践的テーマに関する理論的・実践的研究：災害と被災地支援・復旧復興計画の推進、人びとの生活・困難と葛藤・ストレス、家族・地域社会・日本社会や教育・経済・インフラの在り方、学校を含む公的セクターとその担い手の役割・機能などに関して提起された問題や課題に関する理論的・実証的研究を行う。

(3) 歴史的教訓と被災地支援、復興計画推進、防災方策・防災教育などに関する課題と示唆の検討・整理

<研究組織> ※第1回研究メンバー全体会合資料より抜粋

◆研究代表（日本教育学会会長）：藤田英典

◆研究統括班：宮腰英一（東北大学）、数見隆生（東北福祉大学）、佐藤修司（秋田大学）、境野健児（福島大学）、ほか4人（計9人）

◆事務局：久富善之（一橋大学）、他6人

[A] 幼児教育・学校教育グループ

◆幼児教育グループ：小玉亮子（お茶の水女子大学）ほか3人

◆学校教育グループ（学校）：佐貫浩（法政大学）ほか3人

◆学校教育グループ（教師）：田中孝彦（武庫川大学）ほか6人

◆学校教育グループ（養護教諭）：藤田和也（國學院大学）

◆地震・津波と学校防災グループ：数見隆生（東北福祉大学）ほか3人

[B] 地震・福祉・社会教育グループ

◆自治体・教育委員会グループ：大桃敏行（東京大学）ほか2人

◆社会教育グループ：佐藤修司（秋田大学）ほか1人

[C] 子ども・学校・地域への支援グループ

◆子どものケアと発達支援グループ：片岡洋子（千葉大学）ほか2人

◆学習支援・学校支援グループ：清水睦美（東京理科大学）ほか3人

[D] 原発事故と子ども・学校・地域グループ

◆原発事故・被災と子ども・学校・地域グループ：境野健児（福島大学）ほか2人

◆資源・エネルギー・原発事故と教育グループ：三石初雄（東京学芸大学）ほか2人

今回の特定課題研究は、「学会員に広く開かれた研究活動」が目指されており、新たに研究活動への参加をご希望の場合には、ご関心のある課題グループの責任者に直接ご連絡いただくか、事務局までお問い合わせください。

■ニュース2 ■科学と教育についての「対話」を！！（第2回シンポジウムご案内）

3.11の複合大災害を問い直すいくつかの会で、「放射線・原子力教育」の課題は生活・経済そして教育に多大な影響を与えることは必至であり、価値的な課題であるがゆえに多様な考え方を尊重し意見交換を率直する必要性があることが議論されてきました。

今回、特に論点となっている「低線量被曝問題」の科学的理解について、立場の異なるお二人の意見をお聞きするとともに、これからのエネルギー教育・原子力教育の基本的捉え方と教育実践・教育課題に向き合うスタンス・具体策について、率直に意見交換する機会として5月19日にシンポジウムを企画しました。是非、お出かけください。

シンポ「どうする 放射線・原子力教育 —科学と教育の対話—」

○日時 5月19日（土） 13時半から18時

○主催 エネルギー・原子力教育研究会

○共催 日本教育学会特別課題研究「大震災と教育」グループ

○会場 東京学芸大学芸術・スポーツ科学系研究棟2号棟2階

○内容構成 基本問題・・・梅原利夫氏（和光大学）

1部＝原子力問題を問う —低線量被曝の問題とこれから—

根岸富男氏（原子力教育を考える会）・松浦辰男氏（NPO放射線教育フォーラム）

2部＝原子力教育のこれから

滝口正樹氏（東京都中学校・教師）・小寺隆幸氏（京都橘大学）

浦辺悦夫氏（学習院大学・講師） ・笠 潤平氏（香川大学）

○資料代 500円・・・内実を作りたいと思います。

○問い合わせ：三石初雄（hatsuo@u-gakugei.ac.jp 又は FAX 042-329-7777）

○アクセス：JR中央線 武蔵小金井駅北口から小平団地行きバス（5番乗り場）で「学芸大正門前」下車（約15分）

研究グループの活動状況

—いくつかのグループの活動状況を報告いたします—

◆A◆幼児教育グループ：昨年度は、東松島市立野蒜（のびる）保育所、陸前高田市高田保育所、福島市わたり福祉さくらみなみ保育園等を訪問し、ヒヤリングや交流・支援活動を通して、保育園の保育士や園長のみならず、保護者との交流も行ってきた。2012年度も、引き続き現地におけるヒヤリングを継続する予定である。被災地でその後どのように課題が変容していくのか、そして、それがどのように伝えられていくのかについても併せて検討していきたいと考えている。（文責：小玉亮子）

◆A◆地震・津波と学校防災グループ：まだ実質的な活動や調査に取り掛かっていますが、次のような準備をしている段階です。

①震災から1年以上経って、様々な震災時の事実と教訓が公にされてきている。その資料をできるだけ収集し、学校防災の観点から教訓情報の整理を行う。

②これまでの情報収集の中で、岩手県の小・中学校児童生徒の人的被災（小21人・中15人）は宮城県（小186人・中75人）に比べて少なかった。また、3県の保育園での保育中の園児の人的被災は幼稚園児に比べて極めて少なかった。この違いの背景についての情報収集・調査を行う。

③約1年間行ってきた宮城県下における被災校の調査事実からの教訓を再整理しなおし、その観点からのアンケート調査を作成し、今回被災はなかったが今後津波被災の可能性のある沿岸地域の学校における学校防災の実態と改善状況の調査準備を行う。（文責：数見隆生）

◆B◆自治体・福祉・社会教育グループ：当グループ独自で出していた科研の基盤研究（B）「東日本大震災における教育行政機関・職員の機能と実態に関する研究」が採択された。3年間で1070万円、本年度は400万円というかなり大型なものになった。当科研は大桃敏行（東京大学）、佐藤修司（秋田大学）、紺野祐（秋田大学）、新妻二男（岩手大学）、土屋明広（岩手大学）、石井山竜平（東北大学）、谷雅泰（福島大学）、佐藤広美（東京家政学院大学）で実施する予定である。メンバーである石井山さんの『東日本大震災と社会教育—3.11後の世界に向きあう学習を拓く』（国土社）が刊行されたので、ぜひご一読いただきたい。

当グループでは、1月23-24日に、宮城の被災地を訪問している。まだ動きは本格化していないが、6月に宮城、7月に岩手の訪問調査、打ち合わせ等を行う予定にしている。（文責：佐藤修司）

◆C◆子どもの支援グループ：宮城県の津波被災地および福島県の原因事故からの避難先での子ども支援について現地聞き取り調査などをおこない、あわせて岩手県で進められている支援活動について情報収集をする予定である。すでに3月16日に宮城県気仙沼市を訪問し、小学校、中学校、高校の養護教諭と定時制高校の教員から、3月11日以降の被災状況や児童・生徒の実態とケアについて聞き取りを行った。震災後の一年を過ぎて高校へ入学してくる生徒たちや、津波被災により統廃合される小学校の子どもたちの今後など、あらたな支援の課題についても語られたので、今年度、再度訪問したい。6月には福島を訪問し、スクールソーシャルワーカーによる子ども支援について調査をおこなう予定である。（文責：片岡洋子）

◆C◆学習・学校支援グループ：NPO法人教育支援グループEd.ベンチャー（神奈川県大和市）が支援活動を行ってきた地域を主な研究対象とし、研究と支援の両側面から被災地を捉えていきたいと考えている。本グループでの調査研究としては、2012年2月末に陸前高田市の被災学校での教師に対するインタビュー調査を行ったが、当該学校を含み、2013年度末には中学校3校が1校に統廃合されることが決まった。今後も継続的なインタビューを通して、被災後の2年、3年…と地域、そして、学校が積み重ねていく経験を記録していきたいと考えている。（文責：清水睦美）

—原発事故と子ども・学校・地域グループからのお誘い—

ようやく桜の開花の知らせが届きました。復興と同じように、遅い開花でした。以下のように調査の予定を組みました。参加希望があれば、6名程度まで対応可能です。皆さんにお知らせします。

■テーマ：被災後1年の現状と生徒の進路動向、及び今後の学校づくりの課題についての高校調査

■日時 5月14日（月）

10:00 浪江高校／14:00 相馬農業高校飯舘校／17:30 県立高教組（調整中）

■集合場所 JR本宮駅前9時40分集合（郡山発9.27→本宮着9.40）

■現在の参加者 細金・境野（参加希望者は境野までメールにてsakaino@sings.jp）

東北地方の桜の開花が伝わってきています。先月末には、警戒区域に咲く富岡町の桜が、「日本中に避難している富岡町民を勇気づけるために」という目的で放映されていました。昨年の今頃、現地で、瓦礫の中に花が咲くのを見て「こんな中でも花は咲くんだ。私もがんばろうって思った」と聞いたことを思い出しました。震災後2度目の春の花は、被災地以外に住む私たちが、何を考え続けなければならないかを突きつけているような気がしました。（事務局ニュースNo.2 担当 清水睦美）

